

ひとはひとゆる身のほそる、
芥子がちらふとちるまいと、
なんのこの身が知るものぞ。

わたしはわたし、

芥子は芥子、
なんのゆかりもないものを。

緑の種子

緑の種子

種子はこれ感覺の粹、
緑は金の陰影にして、幽かに泣くはわが心。

種子を哀しめ、よきひとよ、
冷たく、小さき芥子のたね、その一粒に心せよ、
歎歎けかし、日の光。

種子はこれ靈魂の粹、
生ける寶石、「時」の秒、金と緑の衣の秘密、
淫慾の芽の潜伏所、
阿片の精。

種子を哀しめ、よきひとよ、
緑は色の粹にして、
智慧と不思議と生滅の見えざる悲劇、
萬華鏡。

消え去り難き幽霊の
芥子の緑に泣くごとく、
裏切したる歡會の醒めて哀しきわが心。

種子を哀しめ、よきひとよ、
歎歎けかし、日の光。

棗の樹

映畫の中に一本の棗の樹あり。
以太利の街なれば口の光黄色なりけり。
棗には實ありき、その實いと赤かるべきも、
ただ黄にかがやきて影を落せり。

急がしきシネマトグラフの中なれば、誰とわかねど突守
子もなく現はれて氣狂のごと

自轉車乗の若紳士走り廻れり、
何時までも何時までも銀の輪の走り廻れり。

うしろに寶石商の飾窓あり、舗石あり、樹の反射あり。

黒く優しき貴夫人も過ぎゆきにけり。

棗はかがやく。その男走り廻れば
愚かや乗れるその車輪慄へつつ縮まりてゆく。

悲しくわかき男かな、ワイシャツに鼻眼鏡して、

突き當り、跳ねころべども起き直り、走り廻れり。
尻振りさまのかしさを、そのベタル縮まりて玩弄品の
ごとく

今は早や踏むにも堪へね、ひたぶるに走り廻れり

棗はかがやく。サンドウ井ツチ賣の爺は驚く。

悪戯小僧は栗鼠のごと木にかけのほる。
銀の輪は走り廻れり——ありとある、頓狂に戯けたれど
も、

ただにわが憂愁の外にのみ急がしく瞬きにけり。

映畫の中に一本の棗の樹あり、
以太利の街なればその實いと黄色なりけり、
棗は光りき、されども影の影なればある甲斐もなく
見る人の心に耀やきて、また倏忽に消え失せにけり。

人食ふひと

こはそもいづくの空なるや、
はた何時なりや、誰なるや、
人食ふ人ら背も矮く
ひそと聲せず、身じろがず。

瞬みて喚ぐはなにごとか、
はた、なになれば眼も狭く
地の一點を凝視むらむ。
銀鐘のごと日は光る。

青き波紋の刺青は
あくまで黒き頬に青く、
裸の腕に一枚の
皆朱の布をひきかつぐ。

悪しき心の眞晝時
印度當麻の香の中に
笑ます狂はず、しんしんと
ひもじきごとし、泣くごとし。

血の悦樂にたましひの
ふかきうめきを忍ぶにか、
かつ現身を悲哀の
糧と食むにか、さげすむか。

淫慾の肌うつくしく
時に緑蛇ぞ走りゆく、
息蒸すばかり恐ろしき
酷暑の光、葉の濕り。

悪しき神々しろしめす
印度當麻の眞晝時、
すべて事なし、聲もなく、

はたや、そよとの風もなし。

ペンギン

見知らぬ海と空とに
鳴いてゐる、鳴いてゐる、ペンギン、
なにを鳴くのか、ペンギン、
光と陰影の申子。

冷たい氷のうへから
歌ふてくるペンギン、
なにを慕ふのか、ペンギン、
寂しい空のところに。

おそれも悔もない氣ぶりで、
あるいてくる、ペンギン。
なにが楽しいのか、ペンギン。
大勢あつまつて、のんきに。

紺と白との燕尾服で、
ものおもふペンギン。
なにが悲しいのか、小意氣な
わかい紳士のペンギン。

さらさら悲しい様子も、
うれしさうにもない、ペンギン
なにを慕ふのか、ペンギン、
幽かな空の光に。

萬年青

ほれぐと空に小鳥をとりにかし、
君涙して悲めどそれもせんや。
ひと鉢の萬年青すら、いまはその兒に、
手をのべてこそ俯ひ寄りし君がその兒に、
人妻よ、二人してふかく秘めたる赤き實も
遂に知られて、あまつさへ、もぎりとらるゝ。

悲みの奥

白く悲しく、數あまた
釣鐘の花咲きにけり。

縁こまかき神経の
 悲しみの徑、園の奥、
 金の光にわけ入れば
 アスパロガスの葉のかけに
 涙はしじにふりそそぎ、
 小鳥來鳴かず、君見えず、
 空も盲ひし眞晝時、
 白く悲しく數あまた
 釣鐘の花咲きにけり。

夕とどろき

春が逝く。……廢果てたメトロポウルホテルに、
 やはらかな日の光る五時半、

萎れた千鳥草と、石鹼の泡のやうな
 白い小さな花をつけた雑草のなかを、
 やつと五歳のタアシャーが押されてゆく、乳母車に載つ

「銀だ、黄色だ、紅だ、緑だ、ようい……」

春が逝く。……暖かな外光のなかを、
 軽い小兒の夏帽が光つてゆく、河の見える方へ、
 さうして、支那人の老婦が後から黙つて、
 のんびりと、その車を押してゆくと、遠くで
 意味のない叫びがきこえる、なつかしい五月のもの音が、

「銀だ、黄色だ、紅だ、緑だ、ようい……」

春が逝く。……幽かに汗ばんで來た棕櫚の木と、

低く燻ぶつた道の木の間から、
鐵柵を透いて道路が見え、白い蒸汽の櫓が見える。
大河に恍惚とゆく帆船、短艇、煙、水面、
それらが揃つて日に蔭ると、何といふことなしに、
『銀だ、黄色だ、紅だ、緑だ、 ようい……』

春が逝く……夏が来てさへ、一人の旅客も
もう訪ねて来る氣色もない寂しさ。
みんな閉めきつた窓硝子の
ところどころに孔があいて、屋根にはいつのまにか
草が生へた……車から抱いて下ろすと、
坊やのリンネルの薔薇いろがかがやく。
『銀だ、黄色だ、紅だ、緑だ、 ようい……』

春が逝く……外廊の古びた圓い石柱に、
その蔭に坐つてゐる、支那の老婦が
黒い縞子の服の寂しさ……タアシヤは地面の
雑草の花をつまんで揉む、さも無心に。
さうして春が暮れてゆく、月島の方から、何といふこと
なしに
『銀だ、黄色だ、紅だ、緑だ、 ようい……』

石竹

障子閉めても、石竹の
花は出窓にいと赤し、
障子閉めつつ、自墮落に
二人並んで寝そべれど、

花はしみじみ、まだ赤し。
愚かなる花、小さき石竹。

屋根の風見

子を奪ろ、子奪ろ、
鴻の巢の窓に
硝子が光る。
露西亞のサモワル、紅茶の湯氣に、
かつかと光る。
江戸橋、荒布橋。
青い燈が點く……向うの屋根に
株の風見がくるくるまはる。
晴か、曇りか、霽か、雪か、

雲はあかるし、夕日は寒し、
七歳お店の長松さへも
黒い前掛ちよいとしめて、
空を見上げちや眞面目顔、
眞面目顔。

初冬のわかれ

冷えてあかるき園の中、
ただに噴水ぞゆらぐなる。
夏の記憶のなほ白き
楕圓の、菱の花畑
なべてすがれて日も入りぬ。

けふの小徑にわかるれば
紅さるびあの花老けし、
あとに陋しく笑ふなり、
色情狂の前髪の花
花かんざしを見るごとく。

枯れくさの香に、夜のかげに
弱き兒猫も匍ひめぐる。
すべて死したる同胞の
耳のあたりに目をよせて
鳴くもさみしや、針芝に。

冷えてあかるき園の中
空に噴水ぞゆらぐなる。

白雪のごと、玻璃のごと、
君が消えたる襟巻の
鳥の羽よりなほ白く。

黒ダリヤ

烏羽玉の黒きダリヤを胸にあて
加特力の尼はなにをかゆめむらむ。
角帽子雪かとはかりわななけど、
聲さへ立てず、綠玉、息をひそめし腫こそ
精靈の日本の秋の啜泣吸ひ取る如し、泣く如し。
片戀の清きうれひに泣く人よ。
頬の塵うち拂ひ、しづく、と入日のかたに歩みつゝ、
冷やかに尼のごとくも涙せよ。

紅びろうどのいと黒き
つやくくと胸のあたりに光るとき。

春を待つ間に

種子を蒔け、種子を、
葡萄の種子を、
畑を翻け、畑を、
燕麥の畑を。
生めよ、殖えよ、地に満てよ。
哀しきものは踊れよ。
新らしき子らの世繼の
饗宴の春を待つ間に。

白秋詩集 第一卷 (普及版)

定價 壹圓五拾錢



印刷 日八月七年三和昭
行發日二十月七年三和昭

秋白原北者著

雄鐵原北者行發
九〇一町表區川石小日京東

郎太源本山者刷印
〇四町軒五表區込中日京東

編江・本

發行所

東京市小石川
區表町一〇九

ア
ル
ス

振替東京二四八八番
電話小石川三五七〇番

北原白秋著作品集

邪宗門詩集	易風堂	明治四十二年三月十五日
思ひ出	東雲堂	明治四十四年六月五日
東京景物詩	東雲堂	大正二年七月一日
印度更紗	金尾文淵堂	大正三年九月一日
白金の獨樂	金尾文淵堂	大正三年十二月十八日
わすれなぐさ	阿蘭陀書房	大正四年五月三日
雪と花火	阿蘭陀書房	大正四年五月三日
(ローマ字)	のちアルス	より發行す。
思ひ出	東京堂	大正五年七月一日
白秋詩集第一卷	阿蘭陀書房	大正七年七月二十三日
白秋詩集第二卷	阿蘭陀書房	大正九年八月二十八日
觀相の秋	阿蘭陀書房	大正十年一月一日
水墨集	阿蘭陀書房	大正十一年八月一日
白秋詞華集	新潮社	大正十二年六月十八日
小唄集	新潮社	大正十四年六月十日

北原白秋著作品集

あしの小唄集	阿蘭陀書房	大正八年九月一日
日本の民謡集	阿蘭陀書房	大正十三年十月十三日
桐の母花歌集	東雲堂	大正二年一月二十五日
北原白秋篇	阿蘭陀書房	大正四年八月十二日
木馬集	抒情詩社	大正六年六月五日
第二木馬集	抒情詩社	大正八年七月十三日
雀の卵集	抒情詩社	大正九年十二月十日
北原白秋選集	抒情詩社	大正十年八月二十三日
とんぼの眼玉	童謡集	大正十一年一月一日
兔の電報	童謡集	大正八年十月十五日
アアルス	アアルス	大正十一年四月十日
アアルス	アアルス	大正十三年十月十三日改訂版發行

北原白秋著作集

まざあ・ぐうす
祭のむじな
羊とむじな
花吹爺さん
白秋童謡集第一卷
子供の本
お話・日本の童謡
二重虹
からたちの花
象の子

散文集

白秋の小品
螢の指輪
雀の生活
童心の話
洗心雑話
季節の雑話
風景の動光
藝術の光

アアアアア
ルルルルル
ススススス
ア新アアアアア
ル湖ルルルルル
ス社ススススス

大正十年十二月十三日
大正十一年六月十日
大正十一年十月十五日
大正十二年七月十五日
大正十三年七月十日
大正十三年五月五日
大正十三年十二月二十五日
大正十五年三月二十日
大正十五年六月十五日
大正十五年九月十六日
大正五年十月二十三日、のちアルスより發行す。
大正七年六月二十一日
大正九年二月二十日
大正十年六月十八日
大正十年七月十八日
大正十四年五月三日
大正十五年六月二十七日
昭和二年三月十五日
昭和三年二月二十三日

北原白秋氏著

水墨集・詩集

本詩集は氏にとつては更生の大詩集であり、日本詩壇にとつては正に空前の新聲である。本巻に收むる十四章二百數十の詩篇は美にして聖なる至上最高の詩境より滾々として珠玉のやうに溢れ出た靈魂の歌聲であつて、その的確なる表現、鮮新なる感覺、清高なる氣品、自由にして恍惚微妙なる韻律は萬有の神機に參入せる眞の詩人にして初めてよくし得るのである。あらゆる善惡、理非乃至宗教、哲學、科學を超越し飛翔する神秘光耀の藝術の世界がここにある。豁然たる神來の響きがここにある。混沌たる詩壇を照すべき唯一の詩集は本書である。

著者自装・定價參圓五拾錢・送料拾貳錢

北原白秋氏著

季節の窓・隨筆集

本書は詩壇の王者北原白秋氏の年刊隨筆集とも見るべきもので、過去一年の四季風物のうつりかはりにものされた感想、小品、隨筆を悉く収録されたものである。氏が澄み切つた輝ける詩眼を開眼いて時折漏らされた自然に徹したそれ等の言葉の深さ、新鮮さ、その微韻は宛らに讀者の胸に迫るものがある。けだし隨筆中の隨筆、生ける文苑、静夜必讀を薦む。

著者自装自筆挿畫數葉入・定價貳圓五拾錢・送料十錢

北原白秋氏著

風景は動く・隨筆集

本書は「季節の窓」に次ぐ白秋氏の第二感想隨筆集で最近に於ける氏が藝術生活の全容を展開せるもの、童謡論あり、詩歌論あり、批評あり、讀書餘録あり、自然觀あり、一貫する清冽の氣は蕭々として全卷に漲つてゐる。其透徹せる卓見、高邁の論評、繊細微妙を極むる自然描寫は氏が常に詩歌壇の巨擘たるに留まらず、當代稀に見るエッセイストたるを示し、殊に卷末に附した「白秋一家言」四十餘篇は謹嚴なる藝術家としての氏が、藝術の本道と無限の光耀を片語隻句に收め其の秘奥眞髓を喝破した現代の詩歌論語として讃仰されてゐる。

著者自畫自装・定價貳圓・送料八錢

フレック・トリック

北原白秋著

詩と散文との偉大な融合、新鮮馥郁たる近代的表現！

見よ！ 丈餘の路と虎杖、燦爛たる楡の木の微笑、火焰と燕麥、綿羊と白樺、驟雨、驟雨、驟雨、壯快なる極北の大驟雨を！ 更に見よ！ 范漠鐵銀のオホーツク海、白金、赤光、紫金光、閃々光の中を飛翔する三十萬のロツペン鳥の大壯觀を、更に更に見よ、刮目せよ！ 驚倒せよ！ 活動し、匍匐し、生殖し、咆吼する三萬の臘胸獸の大集團を、その争鬪を、喧騒を、海豹島の大歡樂境を、赤裸々なる情慾の世界を、此れ實に詩壇の巨擘白秋氏が北國樺太紀行「フレック・トリック」の一大雄篇である。見よ！ 詩と散文との完き融合を！ 新鮮潑瀾たる近代的表現を！ 若さを、香氣を、律動を！

定價貳圓五錢・送料拾二錢

北原白秋氏著

洗心雜話・詩歌の話

……何れにしても、わかりやすい誰にも解きやすい言葉で、たゞやさしく書いて見たいと思つたが、まだ言葉がいくらむつかしくなつたかも知れぬ。むつかしいものをやさしい言葉で説きわけると云ふ事はそれこそ何よりむつかしい事である。アツシジの聖フランシスがどういふ言葉で雀たちに説いて聴かしたかと云ふ事をしじみと考へる。世の中のいろ／＼なことはむつかしく見ればかぎりが無いが、そのじつ、ごくごくつきつめたところにゆくとやさしいたつた一言でも云へるものである。(中略)で、私のかうした雑話も考へると面が赤くなるだけのものがあるが、いくらかでも心にとまつたものや、歌についてのいろ／＼な苦しい經驗の上から身におぼえのある事だけを何ひとつ知りえぬなりに、とにかく筆にとめて置いたといふまでである。

——(白秋)——

恩地孝四郎氏装幀・定價壹圓貳拾錢・送料六錢

北原白秋氏著

藝術の圓光

・詩論集

詩壇にあること二十餘年、著者の熱情と、努力とは、詩藝術の上に、散文藝術の上に、何人と追従を許さざる彩華と光芒とを照遍せしめてゐることは、萬人是を認むるところである。

詩を以つて終始一貫する著者の一言一句は、眞に詩の大道を知らしむるのみならず、現代日本の詩と將來への呼びかけの言葉であり、純正なる詩道を聽かむとする人々にとつて必ずや、本書はその希求してやまざるものを與へるであらふ。著書の詩論は本書一卷によつて善くつくされてゐる。

恩地孝四郎氏裝幀 ・ 定價貳圓八拾錢・送料拾貳錢

北原白秋氏著

お話・日本の童謡

日本の童謡はどういふものか。それを日本の子供たちに、とりまとめて、わかりやすくお話ししたいと思つて、この『お話・日本の童謡』を編みました。日本の童謡は、何と云つても日本の童謡です。イギリスのでも、ロシアのでも、ドイツのでもありません。支那のでもありません。

昔から日本の山や、河や木や草や、氣候や、お話や、遊びや、さうした中から日本の童謡は生まれました。代々の日本の子供たちから子供たちへと傳はつて歌はれて來ました。で、何と云つても日本の子供たちのものです。今は何んでも西洋かぶれがして謠でも遊びでも玩具でも、昔の日本の子供から傳はつて來た日本の子供のおぼかた忘れられて了ひさうになりました。日本は日本です。日本の子供は日本の子供です。むろん、日本の子供も世界の子供として新しい進んだ子供にならねばなりません。然しやはり日本の子供といふことは根ざしを据ゑて、昔ながらの日本の子供たちから傳はつて來た大切なものを忘れてはならないと思ひます。かういふ考へから、私なども新しい日本の童謡を盛りかへしたわけなのですが、それには今までの日本の童謡といふものが何より大切な礎になつて居ります。(白秋)

恩地孝四郎氏裝幀 ・ 定價貳圓五拾錢 ・ 送料拾錢

北原白秋氏著

日本の笛・民謡集

詩壇の巨匠白秋氏の新民謡集にして、これ民衆の言葉を以て民衆の生活、感情を歌へる眞の民衆の詩也。南風の港に鮎を追ふ素朴なる漁夫の唄。月光の濱に濡れて立つ海女の戀、髪は背の丈、油は椿、磯燕飛ぶ八丈大島の鄰唄。月は桃色宵の月、マンドリンの爪弾を偲ぶべき輕快なる都會情調。博多帯しめ筑前絞、悽艶を極むる博多古調、南國の情熱、雪と落葉松、北國の驛路に咽び泣くが如き追分の哀愁等悉く歌ふべく誦すべし。今や民謡興隆の秋にあたり白秋氏の著まさに太陽の如く出でたり。

恩地孝四郎氏装幀・定價貳圓五拾錢・送料拾錢

北原白秋氏著

わすれなぐさ・抒情小詩

少年老い易し、麗人は刻を千金の春夜に惜む。われらがわかき日の小詩はまさに涙を流して歌ふべし。瑠璃いろ空のかたはれにわすれなぐさの花咲かば、また過ぎし夜のはかなき戀も忍ぶべし。ここに選び出でたるはわが幼きより今にいたるあらゆる詩集の中より、ことに歌ひ易く調やさしき斷章小曲のかずかずすべてみな見果てぬ夢の現なかりしささやきばかり、とりあつむればあはれなることかぎりなし。(白秋)

山本鼎氏装幀・定價壹圓八拾錢・送料六錢

北原白秋氏著

白秋小唄集

四六半截 定價壹圓八拾錢
箱入特製 送料六錢

珠玉の如き小詩を飾るに珠玉の装をなせる華麗無比の美本で、「雨はふるふる城ヶ島の磯に」の小唄を巻頭に歌ひやすく解し易く愛誦措く能はざるもの二百餘篇を収めた。尙餘録として萬人の口に膾炙せる「さすらひの唄」「カルメンの唄」「別れの唄」等を附した。

恩地孝四郎氏裝幀

小唄民謡 あしの葉

四六半截 定價壹圓八拾錢
箱入特製 送料六錢

白秋氏の小唄と民謡は實に日本詩境の至寶とする所である。本書は氏の新作百八十餘篇を収むるもので、清高な藝術的氣品が全卷に横溢してある。裝幀は森田恒友氏、純白の羽二重に清楚な葦の葉を描いたもので近來稀に見る美本である。

森田恒友氏裝幀

北原白秋氏著

とんぼの眼玉 ・ 繪入童謡

全國を風靡せる白秋繪入童謡集です。日本が生んだ最初の童謡詩人の傑作として永遠に傳ふべきは本書です。殊に本書の誇るべきは殆んど各篇毎に、一流畫家の華麗なる挿畫を附したることである。

定價壹圓五拾錢 ・ 送料六錢

兎の電報 ・ 繪入童謡

白秋氏の美しい繪入童謡集です。本書又名流畫家の挿畫を各篇毎に附し、童謡と相對して興味眞に盡きず。藝術愛好者はもとより、一般家庭に「とんぼの眼玉」と共に必ず備ふべき名著です。

定價壹圓五拾錢 ・ 送料六錢

北原白秋氏著

花咲爺さん・繪入童謡

子供達の一番好なのは、白秋先生の童謡です。子供たちの魂を清浄にしてよりよき豊かなる天地に遊ばしめ、その純心をますます先生の美しい童謡の力でぐんぐんと伸びさせて、その心に花を咲かせ楽しい音楽をかなでさせるものは本書です。

定價壹圓九拾錢・送料十錢

子供の村・繪入童謡

新作の面白い童謡に例によつて御馴染みの清水、深澤、永瀬の諸畫伯の美しい澤山の挿畫を童謡各篇毎に入れてありますが、白秋先生御自身も亦繪筆をとられて、挿畫やらカットやらを澤山御描きになりました。本書は今迄日本になかった珍しい大型な正方形をした見るからに感じのいと特製美本です。純真なる兒童讀物としてあまれく學校及び家庭に必ず一冊を御薦め致します。

定價貳圓・送料十錢

北原白秋氏著

二重虹・繪入童謡

この集は主として幼ない子供のために、紫烟草合頃の葛飾生活を歌はれたものです。童謡一篇づゝに、岡本一平氏の挿畫一枚づゝが附せられて居りますので、白秋氏の最も藝術的な童謡集であると共に、岡本一平氏の畫集と云へます。この意味で子供だけではなく一般藝術愛好者にも極めて興味深いものです。

定價壹圓八拾錢・送料十錢

象の子・繪入童謡

本書は白秋氏の繪入童謡集の第八集です。この集には、今迄の作風と全然趣きを異にしたもので、古い傳説とあこがれの異國風な情緒をもつたものや長崎ぶりの切支丹もの、世界小學讀本に題材をとつた非常に面白い童謡集です。挿畫は岡本歸一氏の全生命を傾けて成るもので、一面岡本歸一氏の童畫集とも稱すべきものです。

定價壹圓八拾錢・送料十錢

北原白秋氏著

白秋童謠集・第一卷

白秋氏は童謠を復興し且つ完成せしめた日本童謠の父である。本集は繪入童謠集「トンボの眼玉」「兎の電報」「祭の笛」及英國童謠集「まざあ・ぐうす」を合卷せるもので彼の華麗を極むる繪入童謠集を兒童のための讀本なりとせば、本集は詩歌を愛する人の爲の一大綜合集である。上下三千年を通じて日本が初めて生んだ天成の童謠詩人白秋氏の作品を知らんとする人は本書に依らるべきである。

巻頭を飾るに長篇論文「童謠私観」を以てし童謠の本質を宣明す。

恩地孝四郎氏装幀・定價貳圓八拾錢・送料十錢

388

347

終

